
そばかす少女とちょんまげ幽霊

メドローア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そばかす少女とちょんまげ幽霊

【Nコード】

N0094P

【作者名】

メドローア

【あらすじ】

あの日から、私の普通は変わって行ったんだ。ちょっと息抜きに書いてみました。

（前書き）

息抜きに書いてみました。『俺、転生したんだと』のほうも鋭利製作中です。

ど、どうもー、こんにちは。

『極めてフツー』を自称する少女、『村上夏美』です。

麻帆良学園本校女子中等部2・Aに所属しています。

ほっぺのそばかすがちよいコンプレックスの、ただの中学生です。

全寮制の麻帆良学園なんですが今は夏休み。

という事で実家に帰って、久しぶりにお父さんとお母さん、それとお祖父ちゃんとお祖母ちゃんとのんびりした日々を過ごしています。お洗濯とかお料理とかお掃除とか、そんな事は全部お母さんがやってくれるのでぐっすりだらとした生活を送っていました、今の今まで。

『……ココどこだ……ム、女子？中々の容姿をしてる』

『朝ごはんよ』ってお母さんが呼びに来てくれて、眠い目をこすりながら前を見たら、私と同じ年くらいの男の子が、丁髷に時代劇とかでよく見る着流しを着た男の子が、ふわふわと浮いていました。

『おお、俺の事見えているな』

「……………」

『先の女子は俺の事が見えてなかったみたいだから……まったく、老いた者を無視するとはなっとらん』

「……………」

『ふむ……気絶しておる。』

肝っ玉の小さいヤツだの』

思えばここから、段々と私は『普通』じゃなくなっていった気がします。

何でも彼は江戸時代の人らしいです。
老衰で亡くなっちゃったらしいけど、気付いたら幽霊になって私の前にいたみたいだね。
私以外の家族には見えないみたいだけど……嬉しくないよお。

『とりあえずは名を名乗らんな。』

女子、名は？』

「あのつ、あなた……誰!？」

『俺か？俺は『神泉正宗』だの』

何でも江戸時代から見ればここは魔法の国みたいです。

でも正宗くんは幽霊なんだから、ホントに『魔法』があってもおかしくないかも。

なんて！そんなことないよね！！……『魔女っ子ナツミン』……とか。

『コレは！コレは何だ！？』

「えと、これはコンロって言って火を出す機械で……」

『ぬむう、火が出おった……妖術か？』

「科学って言ってますよ」

『科学……気や魔力も感じぬとは……やるな、科学とやら』

いっつも私の後ろにいるって事は私のプライバシー筒抜け！？

お風呂とか着がえとかも見られてる!?

なんて、そんな事もなくって、その時はちゃんと私の見えないところにいるんだよね。

……私って魅力ないのかなあ……漫画の読み過ぎ?

「『念話』とかますますファンタジーだね」

『便利だろ? けーたいでんわいらずだしな』

「正宗くんが携帯持つ訳にもいかないしね……そしたらポルダーガイストだし」

『それよりとくさつが……』

「……だいぶ俗世になじんでるね」

夏休みも終わって、麻帆良学園に帰って来て。

教室の扉をくぐったらめちゃくちゃ視線を感じました。

髪型変かな? 制服間違えたとか? ……自意識過剰だったらやだなあ。

『俺、見られてんわ』

「え、っ!? 正宗くんって私にしか見えないんじゃ……」

『いや、そんな事もねえみたいだ。』

なんか嬉しいなあ……なっ!』

「ううう……誰かなあ」

『そか、苦勞したんだな』

「……って正宗くん、そこに誰かいるの?」

『幽霊がいるぜ』

……ハア、ちづ姉といんちよとこつやってご飯食べてると帰って来たって感じるなあ。

背中に何か二人憑いてるけど。

私って霊能力の才能とかあつたんだね。

『正宗さんは江戸時代の人なんですか!? スゴイです! 先輩さんです!』

『幽霊歴はさよの方が長いと思うがな』

「……やっぱりあんまり嬉しくない」

「夏美さん？風邪かなにかですか？」

「ホホホホ、ネギを入れてあげましょうか？」

「そっちはもつと嬉しくなあああああーい！！」

夜中にさよちゃん御用達のコンビニに行っただけなんです。

お菓子と飴とをちよつと遅くなった部活帰りに買っただけなんです。
なのになんで、麻帆良の学園内でアクション映画の撮影してるんだ
ろうなあ。

「見て見て正宗くん、さよちゃん、長瀬さんがいっぱいいるね」

『あわわわわわわわっ』

『忍者か……出来るな』

「いじわるっ！？」

妖怪とか魔物とか、そんなの全部本の中のお話だと思ってた。
何かを狙う侵入者とか、テレビの向こうだけのお話だと思ってた。
脇役の私が刃物を持った人に襲われるなんて、舞台の上でもないっ
て思ってた。

「村上殿！拙者の後ろに隠れているでござる！！」

「……血……なんで、斬られ、えっ？だって、私は、私たちは……」

『夏美さん！逃げないとダメです！！』

「正宗……くん」

『前を向け、見据えろ、コレが現実だ』

『普通』でよかった、『普通』がよかった。
でもその『普通』から外れたところに立った時、私はどうすればいいんだろうね。

「……………帰りたいよ」

『そうか』

「早く寝たいよ」

『そうか』

「みなかった事にして、忘れないよ」

『そうか』

「……………でも、見なかった事になんて出来ないよう」

『……………そうか』

「正宗くん……………私、どうすれば……………イイの？」

主役なんて夢のまた夢だと思ってた。

主人公になんてなれやしないって思ってた。

でもあの時私は……私たちは、きっと主役で、きっと主人公で、私と正宗くんを中心に物語は回ってたんだ。

『怯えていい、怖がっていい、逃げ出したくっていい……だがただ……一つだけ、約束してくれ』

「……………うん」

『俺の背中に、しっかりしがみ付いてる』

「うん……………!!」

『……………行くぜ』

「りよっ、了解」

『夏美!』

「正宗くん!」

『「憑依合体!!」!!」』

私はきつと、あの夏の日から『普通』じゃなくなった。
怪我もしたし、痛い思いもした。
でもそれでも、あの日から私の人生は、ずっとずっと楽しいモノになっただ。

「……お主……一体……夏美殿の身体に……それにその刀は」

「コレか？コレは『一字兼正』、俺の愛刀だ。」

そして俺は……神泉村上夏美正宗だ！！」

『イヤイヤ正宗くん、それゴロ悪いから』

私がいて、いつも一緒に正宗くんがいる。

それが私の『普通』だから。

だから、私は『普通』でよくって、『普通』がイイんだ。

「我が流派！我が太刀！！コレぞ天下無双！！！」

「はわぁあっ」

「何という……闘気でござるか！？」

「夏美、合わせろよ」

『うん！』

『「一文字流斬岩剣！この世に斬れぬ物無し！！！」』

（後書き）

もし連載していただける方がいらしたら、こゝ報どうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0094p/>

そばかす少女とちょんまげ幽霊

2010年11月19日22時07分発行